に落ちる理解とはこのようなものであろう．エアロゾルの多様な側面の研究は，腑に落ちるところへ行っていることを願うものである．

謝　辞

筆者がエアロゾル研究にたずさわる機会を得たのは，礒野謙治先生（当時名大教授）の指導による．ライダー観測の揺籃期は，ライダーが金食い虫と呼ばれた時代である．開発費を投入してもさっぱり成果の挙がらぬ時期を耐えることが出来たのは，武田喬男名大教授や故小野晃名大教授の励ましがあったからである．新しい局面を開く端緒となった南極観測では，国立極地研究所の平沢威男教授，川口貞男教授をはじめ超高層グループ，気水圏グループの先生方に多大なご支援を得た．南極での観測は，MAP の一貫として実施され，観測の全般にわたって加藤進京大教授や永田武先生（当時極地研所長）の教えと励ましを得た．研究をともにした大学院学生諸氏（既に官公庁や民間にある人も多い）とは，こまごまとした観測の準備からささやかな結果を得るまでの間，密度の高い時間を共有出来た．伊藤朋之高層気象台課長，森田恭弘氏（元名大助教授），野村彰夫 信大教授ほかレーザレーダ研究会メンバー，前晋爾北大教授はじめ24次南極観測隊メンバー等，南極観測実施にあたって心暖まる支援をいただいたかたは多い．記して感謝の意を表したい．

文　献

McElroy, M.B., R.J. Salawitch, and S.C. Wofsy 1986: Antarctic ozone Chemical mechanisms for the spring decrease, Geophys. Res. Lett., **13**, 1296–1299.

Iwasaka, Y., 1986: Non-spherical particles with antarctic polar stratosphere increase in particulate content and stratospheric water vapor budget, Tellus, **38B**, 364–374.

Solomon, S., 1988: The mystery of the Antarctic ozone hole, Rev. Geophys., **26**, 131–148.

Wofsy, S.C., M.J., Molina, R.J. Salwitch, L.E. Fox, and M.B. McElroy, 1988: Interactions between HCl, NOx, and H_2O ice in the Antarctic stratosphere: Implications for ozone, J. Geophys. Res., **93**, 2442–2450.

なお，気象集誌の63巻(1985) 2号の一部が SAGE 特集号にあてある．この号には，人工衛星による極域成層圏エアロゾルの観測や，ライダーの成層圏エアロゾルの観測の速報が掲載してある．

日本気象学会1990年度秋季大会の報告

日本気象学会1990年度秋季大会は，大阪管区気象研究会との合同の形で，1990年10月24～26日，京都市の京都府総合見本市会館で行われた．管区研究会を含めた参加者総数は533名で，うち一般申込による大会参加者が407名，招待者が24名であった．講演申込は240件であったが，4件の取り消しがあり，最終的には236件（第1種講演123，第2種講演104，ポスター11）となった．第2日の午後には，3件の記念講演に引き続き，「集中豪雨」のテーマで恒例の大会シンポジウムが行われた．

口頭発表ではビデオの使用希望が数件（最終的には6件）あった．会場の都合上，ビデオの上映はポスター・セッションの時間に並行してまとめて行われたが，好評であった．ビデオの発表希望者は今後さらに増えると思われるので，専用プロジェクターなどを確保し，これらの希望に対応できる体制を早く作るようにしたい．

なお，口頭発表の第2種講演申込の比率がやや増加の傾向があるが，これは第2種講演の趣旨にふさわしい予稿の書き方がなされていないものの増加傾向と関係がある可能性がある．そこで次回の大会では予稿集原稿をこれまでよりも厳しくチェックする必要があると思われる．

最後になりましたが，大会事務局として通常業務のかたわら大会準備・運営にご尽力頂き，秋季大会を盛会裏に終えられた大阪管区気象台の方々をはじめ，関西支部の皆様に敬意を表し心から感謝します．

（講演企画委員会）